

「満蒙開拓青少年義勇軍に応募 終戦で懸命の逃避行」

中川 昭次 （93歳）

川西市小戸の猪名川沿いにある桜並木は毎春見事な花を咲かせ、今では川西の桜の名所になっています。この桜の樹は地元小戸の30名ほどのフラワーメイトの人たちによって植えられ、大切に育てられて管理されているわけですが、その中心になって桜の樹を守っておられるのが中川さんです。毎日のように桜の樹の世話（施肥など）や樹の周りの花園の面倒を見ておられ、この影の力が毎年見事な花を咲かせているわけです。中川さんはこのように素晴らしい方ですが、実は大変な経験をされ、波乱万丈の人生を歩んでこられた方でもあります。以下にご本人からお聞きした話を基に年表形式でその歩みを追ってみたいと思います。

※中川さんのあゆんできた道のり

- ・1927年（昭和2年）2月27日 中川昭次さん池田市木部で荒物・蒔蒔屋の長男として生まれる（2人の姉と1人の妹の4人）
- ・1932年（昭和7年）3月1日 満州国 建国宣言
- ・1933年（昭和8年）4月 池田 細河小学校に入学

・1936 年（昭和 11 年）2・26 事件により軍部の発言力が増大し、関東軍と陸軍省作成の「満州農業移民百万戸移住計画」が策定される。

・1937 年（昭和 12 年）7 月 7 日 日中全面戦争始まる

・1940 年（昭和 15 年）4 月 細河高等小学校 2 年時 的場好一訓導に説得され、＊満蒙開拓青少年義勇軍に応募（補充兵として）。加藤完治が所長を務める茨城県内原町（水戸市）にある満蒙開拓青少年義勇軍訓練所で一ヶ月余りの訓練を受け、6 月末に満州へ（神戸から船で大連へ、大連から満鉄で現地訓練所がある鉄驪に到着）

・1941 年（昭和 16 年）12 月 8 日 アジア太平洋戦争始まる

・1943 年（昭和 18 年）鉄驪で 3 年間の訓練（軍事訓練と開拓訓練）を受けた後、ソ連国境間近の黒河省・遜河・毛藍河（モウランホ）の大栄開拓団に配属される（大阪中隊 230 名の一員として。実際はほとんどが兵役に取られ 100 名ほどになっていた）

・1944 年（昭和 19 年）10 月 10 日 米軍沖縄を空襲 12 月神風特攻隊 米艦に突撃大栄開拓団のほとんどの人が兵役に取られ、残ったのは 10 名のみ

・1945 年（昭和 20 年）8 月 15 日 天皇戦争終結の詔書を放送（終戦）

8 月 9 日 ソ連がソ満国境を越えて進攻。関東軍は開拓民を置き去にして率先して逃亡する中、残された各地の開拓民（大栄、大黒河、大公河、三州）は合流し、

後から加わった敗残兵などを加えて総勢 200 名余りで約 1 ヶ月間逃避行。中川さんの持っていた磁石を頼りに北安（ペイアン）を目指し人跡未踏の小興安嶺を超えて苦難の末に 9 月 12 日通北に至る。

途中、渡河中に水死、ソ連兵による射殺、敗残兵の手榴弾による自爆死、足手まといになる子供を親が殺すなどと言った悲惨な事件も。持って行った米などの食料は底をつき、連れて行った牛や馬を屠殺して食べたり、野生のブドウやキノコ、ハシバミの実などを食べて命をつないだそうです。尚、同行した大黒河開拓団の古賀氏の手記によれば、一緒に連れて行った満人（中国人）を“ソ連に通じる”として射殺したとの記述もあります。中川さんは通北に残っていた恵那郷開拓団に懇願され、翌年まで恵那郷開拓団と一緒に生活。

・1946 年（昭和 21 年）9 月 中国共産党の指示で通北から鶴岡炭鉱へ、各地から集められた 1000 人程の日本人と一緒に中国人に混じって 7 年間炭鉱で働く。

・1953 年（昭和 28 年）帰国。 鶴岡→牡丹江→奉天→天津を経て塘沽（タンクー）から赤十字が手配した興安丸に乗船し 8 月 25 日に舞鶴港に、その際、中川さんは戦災孤児 20 名を連れて東京都足立区にある引揚者住宅に入る。当時、中国からの帰国者は共産党の烙印を押され、まともに就職できず、青森県の八甲田山の麓、酸ヶ湯温泉の近くの沼平にある開拓村（引揚者村）に移住する。

しかし、開拓村とは名ばかりで一面の竹藪でした。1 年目は刈り取った笹で小

屋を作り、2年目に県の補助で木材を使って自分達で共同住宅を建て、暮らしたとのこと。冬は4メートルの積雪で2階から出入りする生活でした。中川さんはこの地で牡丹江で出会った中国人に引き取られていた残留孤児の奥さんと結婚。

・1956年（昭和31年）青森での生活に見切りをつけた中川さんは奥さんと一緒に大阪に戻り、当初池田の中ノ島に居たお姉さんと一緒に暮らしたが、川西の萩原に移り、滝山にいた小父の下で植木について学ぶ。その後2年ほどして住友信託に嘱託として勤め始め小戸で暮らすようになったそうです。

（聞き手 紀川清）

*満蒙開拓団の入植地の確保にあたっては既存の地元農民が開墾している農村や土地を「無人地帯」と指定し、地元農民を「集団部落」へ強制移住させるとともに、満州拓殖公社がこれら「無人地帯」を安価で強制的に買い上げ、日本人開拓移民を入植させる政策が行なわれた。およそ2000万ヘクタールの用地が収容され、買収価格は時価の1割から2割で、開拓民が入植した土地の6割はこうして地元の中国人が耕作していた土地を強制買収したものであった。（ウィキペディアの満蒙開拓団を参照）